

## 劇場でのしごと

——滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールを例に

上原恵美

最近、アートマネジメントを学ぶ学科やコースを新しく設置する大学が増え、この分野に対する学生の関心が高まってきている。文化施設の中でも、図書館には司書、博物館や美術館には学芸員という専門職が個別法で定められており、その資格を取るためのコースも用意されているのに対し、劇場やホールについては「劇場法」といった個別法がなく、専門職制度も確立されていない。そのため学生の中には劇場やホールでの仕事について具体的なイメージがつかめず、「劇場に就職したい」という漠然とした願いがあっても就職活動には結びつかない。全国に1500以上ある公立文化会館のうち「専門」職を必要とするような事業を展開しているものがどのくらいあるかということも疑問ではある。さらに指定管理者制度が導入され、期間を区切った指定管理となるとさらに「劇場への就職」「劇場での専門家への道」は難しいものとなるおそれがある。

ここでは、1998年に開館したびわ湖ホールを例に、劇場ではどんなしごとが必要とされているのかを紹介してみよう。

びわ湖ホールの年間の総経費は約15億5000万円（2004年度）。うち事業費約7億円が自主制作を含めた年間70～90公演の自主事業にかかわる経費である。スタッフ42人に加えてレジデントの音楽家集団16人、その他舞台管理、受付案内、設備運転管理、清掃、警備などの業務を委託している。それぞれの仕事の内容は、びわ湖ホール事務局組織図のとおりである。

劇場のレジデントとしての音楽アンサンブルは、日本ではびわ湖ホールのみである。新国立劇場合唱団との違いは、一つにはびわ湖ホールの場合は

嘱託職員としての雇用契約であるが、新国立劇場の場合は登録団員との出演契約であるという点。第二に、びわ湖ホール音楽アンサンブルはソリスト集団であるため青少年オペラ劇場のようにメンバーがソロをつとめる公演が年間に何回か必ずあること。三つめに、年4回の定期演奏会を開催していることなどがあげられる。

レジデント・アーティストがいることは、ホールの活動の幅を拡げることになる。たとえば、彼らは県内の小学校に毎年10回公演に出かける。また学校の求めに応じてピアニストとアンサンブル2人の3人が教室に出向いて歌唱指導を行っている。年2回のロビーコンサートでは、日頃コンサートに来ることのできない幼児連れや乳母車を押した人たちにぎわう。びわ湖ホールでは音楽アンサンブルを音楽家にとってのワンステップ、大学を卒業してから舞台経験を積んでいく場と位置づけている。一度の本番は数回分の練習に勝るといわれているが、本番のための練習の積み重ねは貴重な修練の場となっている。すでに外国に留学した者、海外や東京で活躍の場を見つけた者、新国立劇場オペラ研修生になった者などびわ湖ホールから羽ばたいていった人たちもいる。

ここでは、アンサンブルのマネジメントを担当する職員が重要な役割を果たす。16人のメンバーは、ある程度の自由度が確保される嘱託職員という身分であり、ほかでの活動をしているため、基本的にはメンバーそれぞれがマネジメントをしてはいるものの、全体をまとめ、日程を調整管理し、いい舞台をつくっていくための心労は絶えない。

本格的なオペラ上演のできる四面舞台を備えた

びわ湖ホールでは、制作のプロセスや規模、キャストの決定方法などが異なる3種類のオペラを制作している。

一つが1年に1度秋に公演するびわ湖ホールプロデュースオペラ。これはびわ湖ホール芸術監督若杉弘を総監督として、ヴェルディの日本初演作品を上演するものである。指揮は若杉弘。芸術監督の指名で演出家（鈴木敬介氏）、キャストが決まる。合唱はびわ湖ホール声楽アンサンブルと東京オペラシンガーズ。指揮者、演出家、出演者の都合で東京での準備や稽古の期間が長いためもあって民間の制作会社・アートクリエイションに業務の大半を委託して実施している。本番の10日前からびわ湖ホールでの仕込みや練習がおおよそ次のような日程で行われる。

- 1日目 舞台・仕込み
- 2, 3日目 舞台・仕込み、オーケストラ練習
- 4, 5日目 舞台・ピアノでの稽古、オーケストラと歌手との合わせ稽古——出演者は合わせ稽古終了後、舞台上でのピアノ稽古へ
- 6, 7日目 オーケストラとの舞台稽古（HP）
- 8, 9日目 総舞台稽古（GP・ゲネプロ）

（ダブルキャストでの2日連続公演のためそれぞれが2日ずつの練習となる）

二つ目が1年に2演目それぞれ2回公演する青少年オペラ劇場である。びわ湖ホール声楽アンサンブルがソリストをつとめる。

三つ目が「びわ湖の夏・オペラ ビエンナーレ」。名前の通り2年に1度、ソリスト、合唱を公募して上演する公募型オペラである。

二と三については、芸術監督が演目、指揮者、演出家を決める。制作はびわ湖ホールのスタッフがとめる。

2004年7月に公演したオペラ ビエンナーレ「ジプシー男爵」を例にオペラを制作する劇場でのしごとを紹介してみよう。

まず、演目の決定である。約2年前に、いくつかの候補をあげ、作品についての調査を行う。この調査に基づいて芸術監督が演目を決定する。ついで、同時進行で公演日、オーケストラ、指揮者、演出家を決めて交渉を進める。ソリスト、合唱団

を公募するための準備として、オーディションの日程、オーディションでうたってもらふ曲目の選定、審査員の決定、ピアニストの依頼、広報などがある。「ジプシー男爵」の場合オーディションは前年の12月、公募期間は2カ月間であり、これらの作業はオーディション実施のはほぼ6カ月前には終了していなければならない。

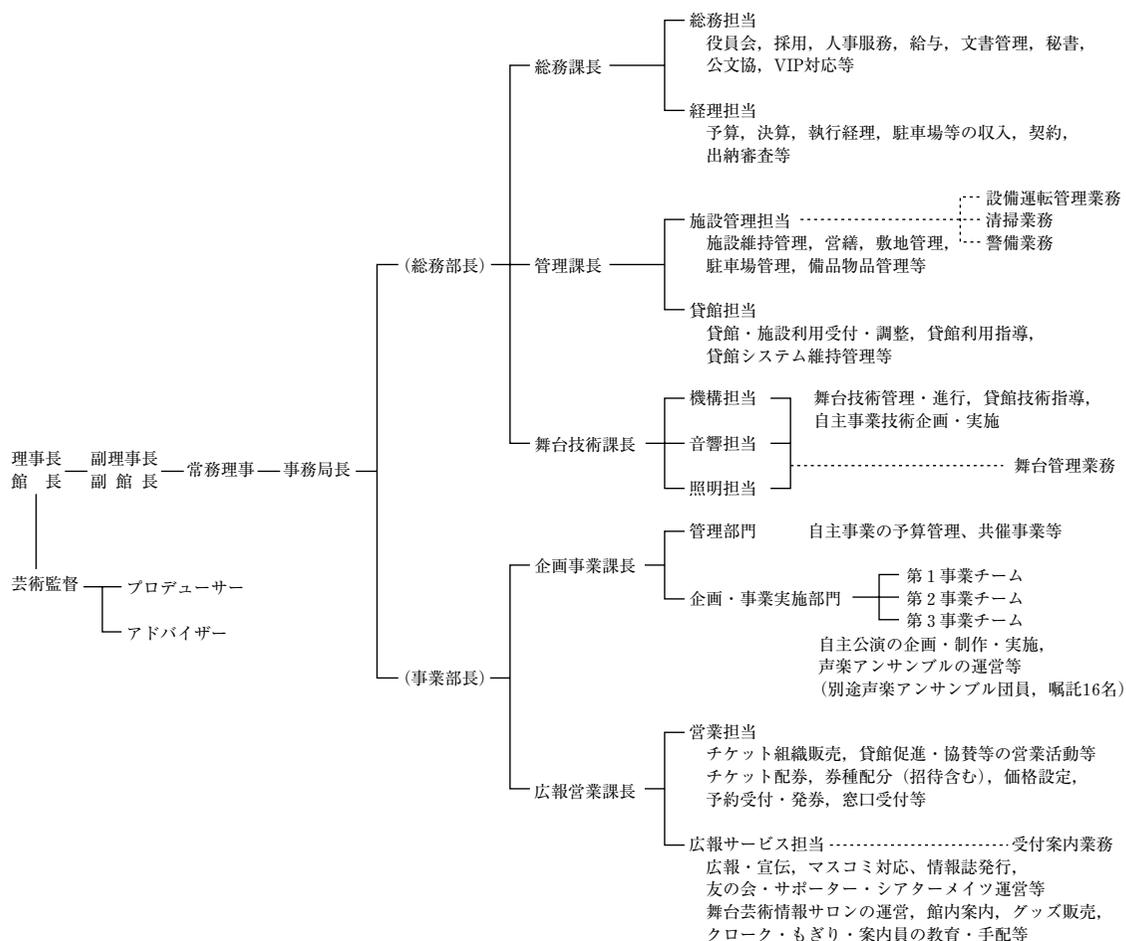
演出プランが決まり、大道具などの舞台装置や衣裳のデザインが練られ始めるのは、公演日の8カ月前。生演奏のオペラであるだけに、舞台装置については、音を吸い込んでしまう素材を避けたり、客席に歌手の声が届くよう位置を決めるという配慮が必要である。デザインに基づいて舞台装置や衣裳が作成され始めるのが約1カ月前である。

一方、指揮者のもとで音楽スタッフとしての合唱指揮者、副指揮者、練習ピアニスト、ヴォイス・トレーナーなどの音楽スタッフが決まって、ソリストの個人練習や合唱練習が始まるのは、公演日から逆算すると約6カ月前である。6カ月間にわたる練習日程を組むことは制作の大きな仕事である。音楽練習が進んで本番3カ月前になると立ち稽古が始まる。ここでは演出家の指示の下、演出助手、舞台監督助手が稽古場に立ち会うことになる。立ち稽古では舞台装置に代わるものが練習場に置かれ、帽子やマントなど衣裳に代わるものを使う。それを手配するのは舞台監督部のスタッフである。

公演のための稽古が進む一方でチケット販売のための広報準備が進められる。チケット売り出しは公演日の4カ月前。そのためのチラシ作りはそれよりさらに2カ月前には始まる。新聞や雑誌に取り上げてもらうため、制作発表をしたり、練習を公開する。

照明デザインも演出家の意図を組んでつくられていく。ちなみに「ジプシー男爵」に使われた照明機材は約460台、フォーカス作業だけで約8時間かかっている。オペラでの音響の仕事は、たとえば舞台裏での演奏や合唱を客席に届けるための仮設の音響反射板の設置、オーケストラの音を舞台奥で演じる人に届ける工夫など音楽的レベルを上げるためには不可欠である。場面転換や演出上使われる舞台機構の操作もホールスタッフの仕事

図 財団法人びわ湖ホール事務局組織図



である。舞台監督は、舞台の進行すべてを司るキーパーソンである。これをホール・スタッフが務める場合もあるが、「ジプシー男爵」の場合は制作監督をスタッフが務め、舞台監督は外部の方にお願いした。このようにホール・スタッフと外部のスタッフとが協力して制作を進めていく。こうして劇場で作品を制作することによって経験を重ねたホール・スタッフは、内外の劇場やカンパニーのスタッフとの意思疎通も容易となり、その共同作業によってさらに経験が広がる

さて、名指揮者・故カラヤンはいい舞台をつくるためには、Atmosphere, Acoustic, Artistsの3つのAが必要であるといった。その最初のAを維持管理することは、客席からは見えない(見えてはいけない)が、劇場にとっては肝心なこと

である。舞台裏の照明、音響、機構などの装置や機器も同様である。毎日がメンテナンスの連続とっていいだろう。日々の作業の中で気がつく微細な変化への対応が早期発見・早期治療につながる。この対応が不十分であると不安、不信という心理的な問題が生じるだけではなく、大きな事故にもつながりかねない。

このようなさまざまな仕事を支えるスタッフの養成確保のためには、まず第一に、ホール自ら創造活動に取り組んだり、内外の劇場やカンパニーのスタッフやアーティストとの共同作業といったステップアップにつながるやりがいのある仕事があること、第二に、一の積み重ねによって生まれる劇場や舞台に対する愛情と誇り、使命感、相互の尊敬と感謝の念。さまざまな持ち場でいい劇場

しごとのために最善を尽くすという意気込み。そして第三に、適正な労働時間や生活できる賃金の保障など安心して働ける雇用条件の確保が必要であることは他の仕事と同じである。

劇場はこのような専門的経験を積んだスタッフ

によって支えられているのである。

うへはら・えみ 京都橘大学文化政策学部教授。滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール館長。